

引用文献

北村四郎・村田 源 1974. 原色日本植物図鑑, 木本編(Ⅰ). 保育社, 東京
Kurita, M. 1982. Some notes on the *Rhodo-*

dendron plants from Japan XVI. Internal aspect of winter bud scale. Jour. Phyto-geog. and Taxon. 30: 39-41.
牧野富太郎 1975. 新日本植物図鑑. 北隆館, 東京

〔新刊紹介〕 橋本郁三著「野山の草木で酒づくり——色・味・香を楽しむ——」A 5 判, 158 頁, 農文協, 昭和63年2月29日発行, 1,300 円。

この本は文字どおり野山の草木で酒づくりをする方法と楽しさを書いた本である。

まず表紙を開くと、リキュール、草木、そして草木の酒づくり材料のカラー写真が目をはひく。続いておいしい酒づくりの基本を簡潔平易に述べてあり、特にアルコールの選び方、材料、砂糖の使い方、温度等が述べられ、たいへんわかりやすく見ていく中にひき込まれて一気に読んでしまう。又植物学の用語の解説までつけられている。

著者は野山、低山から高山まで至る所の草木の花、実、茎葉等を材料として、甘口、辛口、すっぱいもの、渋いものなどいろいろな酒づくりに挑戦して、その体験から得られたリキュール 180 種のつくりかた、色、香り、味に至るまで細かく述べてあり、特に色の演出といった微妙な点にも触れて酒づくりがいかに奥深く楽しいものかを語りかけている。

野山を歩かれる皆さんがこれを読む時恐らく「あの木の実、茎葉を使って酒づくりに挑戦して見よう」という気持ちになれることはまちがいないと思われる楽しい本である。

(S.S.)

〔新刊紹介〕 長野県自然教育研究会(編) 清水建美(監修) 「信州の野草かんさつ」A 5 判, 242 頁, 2,000 円。

長野県自然教育研究会は、県下の小、中、高校の教師で構成され、自然の教材化と野外観察の普及を目ざしている方々の集まりである。したがって、この本は、校務多忙で、なかなか時間がとれない中から、自然教育に役立てようと休日返上で努力された賜と言える。本会の会員の先生方も多く参加され、執筆されている。

この書は、畑や道ばたに生える身近な野草、450 種を 840 枚のカラー写真で紹介している。普通の植物図鑑としては、少ない種だが、それだけに、一つ一つの植物について詳しく解説されていることがわかる。植物名のいわれ、生態的な特徴、遊びや利用の仕方までも扱われている点、単なる図鑑でなく、先生方の、不断の自然への目が、そして、その豊富な記録の蓄積と見ることができる。

基礎的な用語や生態の特徴は、さらにコラム的に解説、類似の種についても、一括して表や写真で比較してくれているのもありがたい。

読むほどにおもしろく、自分でも調べてみたいと思わせてしまう本である。

(田中)

〔新刊紹介〕 柴田 治(編著)「山歩きウオッチング—自然の探索ノート—」B 6 判 171 頁, 内田老鶴圃発行(1987年7月) 1300 円。

幹線交通網の発達、山奥深くまでのびた車道やロープウェイ等によって、以前には考えられなかった手軽さで、多くの人が高山に立ち入れるようになった。そのため、霧のなかでふるえる観光客などを目にするのは日常的な事となった。これでは、せっかくの自然を楽しむどころか、時には重大な危険にさらされるであろう。「しかし、山は本来は気の優しい恥ずかしがり屋でもある。ことに、そこに息づいている生き物たちはそうである。私たちが思いやりの心でこの恥ずかしがり屋に接するならば、……もっとも愛すべき山友だちとなってくれることであろう」(まえがきより)。信州の山々を歩き、植物の生活を生理学的に研究している編著者の、長い経験と知識に裏づけられた本書は、「山歩きアラカルト」(内田老鶴圃発行, 1985年)とともに、「楽しく安全な山歩き」の手引書である。

(K.S.)

〔植物ニュース〕 113. チャボガヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. var. *radicans* Nakai

本県におけるチャボガヤの南限について北安曇郡誌と神奈川県立博物館研究報告第1巻第3号に佐野坂以北に多いとあり、大町市産植物目録には高瀬溪谷にもあるとあるが、南安曇郡誌には記載されていない。県中央部においては杉本氏の長野県植物総目録に猿番場峠が記載されている。

私は坂井村の村誌編纂のための調査で10余年前同村の安坂神社境内にあるのを見、同じ頃梓川村の穴沢右岸でも見ているが、ここは浅い山地で自生かどうか疑問もないわけではなかった。

ところが昨1987年10月11日安曇村の村誌のための調査で同村湯川下流の右岸海拔1100mの地点で小群を確認したが、ここは深山で自生であることに疑はない。これより南にはないと断定できないにしても一応この辺が南限とみてよいように思う。(奥原弘人)